

武蔵野日曜集会

活水

――ヨハネ伝第7章25～44節――

1994年11月13日

小池辰雄

生命の言 平伏し キリスト・イエスにある神の愛 眞の者あり 肉なる我と霊なる我 腹よ
り活ける水 十字架・聖霊の人 聖霊の力と智慧

【ヨハネ7・25～44】

²⁵ 爰にエルサレムの或る人々いう『これは人々の殺さんとする者ならずや。
²⁶ 視よ、公然に語るに之に対して何をも言う者なし、司たちは此の人のキリス
ストたるを眞に認めしならんか。²⁷ 然れど我らは此の人の何処よりかを知る、
キリストの来る時には、その何処よりかを知る者なし』²⁸ 爰にイエス宮にて
教えつつ呼わりて言い給う『なんじら我を知り、亦わが何処よりかを知る。
されど我は己より来るにあらず、眞の者ありて我を遣し給えり。汝らは彼を
知らず、²⁹ 我は彼を知る。我は彼より出で、彼は我を遣し給いしに因りてなり』
³⁰ 爰に人々イエスを捕えんと謀りたれど、彼の時いまだ到らぬ故に手出する
者なかりき。³¹ 斯て群衆のうち多くの人々イエスを信じて『キリスト来るとも、
此の人の行いしより多く徴を行わんや』と言う。³² イエスにつきて群衆のか
く囁くことパリサイ人の耳に入りたれば、祭司長・パリサイ人ら彼を捕えん
とて下役どもを遣ししに、³³ イエス言い給う『我なお暫く汝らと偕に居り、
而してのち我を遣し給いし者の御許に往く。³⁴ 汝ら我を尋ねん、されど逢わ
ざるべし、汝等わが居る処に往くこと能わず』³⁵ 爰にユダヤ人ら互に言う『こ
の人われらの逢い得ぬいずこに往かんとするか、ギリシヤ人のうちに散りお
る者に往きてギリシヤ人を教えんとするか。³⁶ その言に「なんじら我を尋ねん、
然れど逢わざるべし、汝ら我がおる処に往くこと能わず」と云えるは何ぞや』
³⁷ 祭の終の大なる日にイエス立ちて呼わりて言いたもう『人もし渴かば我
に來りて飲め。³⁸ 我を信する者は、聖書に云えるごとく、その腹より活ける水、
川となりて流れ出づべし』³⁹ これは彼を信する者の受けんとする聖霊を指し
て言い給いしなり。イエス未だ栄光を受け給わざれば、御霊いまだ降らざり
しなり。⁴⁰ 此等の言をききて群衆のうちの或人は『これ眞にかの預言者なり』
といい、⁴¹ 或人は『これキリストなり』と言い、又ある人は『キリスト争で



ガリラヤより出でんや、⁴² 聖書にキリストはダビデの裔^{すえ}またダビデの居りし村ベツレヘムより出づと云えるならずや』と言う。⁴³ 斯くイエスの事によりて、群衆のうちに紛争^{あらそい}おこりたり。⁴⁴ その中には、イエスを捕えんと欲する者もありしが、手出^{てだし}する者なかりき。

●生命の言

「先生、元気な秘訣は何ですか」と聞かれると、私は、

「秘訣も何もありません。ただ、はつきり言うと、私の力は天界からきているんだ」と答える。正直、霊界から力をいただいているような人はあまりいない。クリスチャンなんていつても、観念的なものが多い。

「聖書の研究で聖書が分かるか、天来の光で読め」

と言うわけです。聖書は生命の言葉であって、意味ではない。

「わが言^{ことば}は霊なり、生命^{いのち}なり」

とキリストが言われた。これはキリスト自身の御言ですから。キリストが言葉を発すると、霊なる生命なる言葉自身が霊的な波動になって、相手の人が救われていく、力を得ていく。キリストはいわゆるお説教なんかしてない。生命の言を与えておられた。我々も聖書は、生命の言を食らう。聖書の文字を食らうように読まないと、本当は読んでいることにならない。それで聖書は楽しいわけです。

昔が単に昔でなくて、いつも現在してくる。本当の生き方というものは、過去を現在化して、未来をまた現在に引き寄せる。そういう永遠的な質をもった現在を生きていないと、本当は生きているということにならない。

「神のうちに生き動きまた在るなり」

とは、パウロの好きな言葉です。これはゲートルも非常に好きで、彼の詩の中にも出てきます。私たちは、

「キリストの中に生き動きまた在るなり」

ということ。人間ですから、躓いたり転んだりいろいろなことがありますけれども、しかし、根底においては「キリストの中で生き動きまた在るなり」ということです。本当に平伏^{ひれふ}していると、その世界に入れられる。傲慢な魂はダメです。平伏しの魂です。

●平伏し

私が無というの、姿でいうと「平伏し」のことです。これは私が無い無私^{むし}ということ。無私の最大のはイエス・キリストです。キリスト自身が私の無いひとです。

「我れ何^{なに}ごとをも為し能わず。わが言う言葉はわが言葉にあらず」



「父がさせているだけだ。父が言わせている。主なる神がさせている。神さまが言わせている」

と、キリストは自分をゼロにしている。そういう無私の無です。虚無ではない。「私が無い」というと、「神が有る」ことだ。神が降りてくる。私たちは自分で無私にはなれない。キリストの十字架の贖罪で無私にされている。キリストから無私という現実をいただいている、賜っているわけです。賜りたる現実です。だから、祈りのときは平伏して祈る。そうすると、我々にはキリストがやってくる。

この平伏しの姿には、キリストは、過去・現在・未来のその人の相対的な在り方なんて問題にしないで、捕まえてくださる。ありがたいことです。これは絶対、恩寵という、無条件な恵みの世界です。

「信仰、信仰」

と言って、自分の信仰をサムシングにして、

「信仰が大事である」

なんて、信仰ということを非常に問題にしている。信仰がサムシングになっている。信仰を私したらダメなんです。そんな信仰はくたびれてしまう。私は、

「信仰も何ありません。上からの恵みの力だけです」

と言う。聖霊の世界になると、上からくるこの恵みの力を受けとる、こういう角度です。太陽の光を受けとる。こっちから光を放っているのではない。こっちから何か霊的な光を放とうとしたら、くたびれてしまう。受けとるばかりです。そうすると、それがやってきて、それが私たち一人びとりの中で燃えだす。泉として湧き出でる。また、火として燃えだす。

聖霊は水に例えられたり火に例えられたりする。

「我れ火を投ぜんために来たれり」

とは、聖霊の火のことです。今日のところは水、活ける水だ。活ける水が腹から湧き出でる。我々は聖霊を水と自覚したり、火と自覚したりする。「水火相容れず」ではなくて、「水火どちらでも結構だ」というわけです。これは聖霊の世界です。

「これは聖霊について言った」

と、今日のところにも書いてある、

「御霊いまだ降らざりしなり」

と。ペンテコステがくるまでは聖霊は臨まなかった。キリストはもちろん聖霊を内住している方ですけども、使徒たちはみなペンテコステが来てやっと聖霊をいただいた。パウロはダマスコ途上でひっくり返されて聖霊を受けた。聖霊が来るまではキリスト者ではない。

●キリスト・イエスにある神の愛

ローマ書8章にそのことが書いてある。ローマ書8章というのは大事なところです。内村先生は、

「ローマ書8章はダイヤモンドみたいな所だ」と言った。

「⁹然れど神の御霊なんじらの中に宿り給わば、汝らは肉に居らで霊に居る。「肉」とは生まれつきの我のことです。「に居る」という言い方はその中に住んでいる、生きているということ。」

キリストの御霊なき者はキリストに属する者にあらず。

とはつきり書いてある。「キリストの御霊」ですよ。私たちはキリストを通らなければ御霊は来ない。いきなり「神の御霊」というわけにはいかない。

¹⁰若しキリスト汝らに在まざば^{いま}体は罪によりて死にたる者なれど^{からだ}霊は義によりて生命に在らん。

「魂にいただいている霊は義によりて生命にある」

ということ。キリストが与えたもうところの恵みは義という。

「義人なし一人だになし」

というのは、キリストの義は誰も持つていない。これは賜る義である。義も愛も結局同じことです。聖霊の角度が義で、十字架の角度が愛です。生命を棄てて、また生命を与える生命を棄てる方が十字架で、生命を与える方は聖霊の方です。キリストは両方なされたわけで、これは離すことができない。

¹¹若しイエスを死人の中より甦えらせ給いし者の御霊なんじらの中に宿り給わば、キリスト・イエスを死人の中より甦えらせ給いし者は、汝らの中に宿りたもう御霊によりて汝らの死ぬべき^{からだ}体をも活かし給わん。」（ロマ8・9～11）

「キリスト・イエスを死人の中より甦えらせ給いし神さまは、汝らの中に宿りたもう御霊によりて汝らの死ぬべき^{からだ}体をも活かし給う。」

と素晴らしいことが書いてある。ローマ書8章というのは本当にダイヤモンドみたいな大変な所です。8章の終りの方は素晴らしい讃美歌みたいだ。37節に、

「³⁷然れど凡てこれらの事の中にありても、我らを愛したもう者

キリストです。

に頼り、^よ勝ち得て余あり。^{あまり}38われ確^{かた}く信ず、死も生命も、御使も、権威ある者も、今ある者も^{のち}後あらん者も、

一切の相対的なものということ、

力ある者も、

この世の権力者です、



³⁹高きも深きも、此の他の造られたるものも、これはみな相対的な世界です。

我らの主キリスト・イエスにある神の愛より、我らを離れしむるを得ざることを。」(ロマ8・37～39)

「キリストにおけるところの神の愛」というのは大変なものです。パウロというのはやはり凄い。こういう言葉がローマ書8章に出ている。26節も大事なところですよ。

「²⁶斯くのごとく御霊も我らの弱を助けたもう。我らは如何に祈るべきかを知らざれども、御霊みずから言い難き嘆きをもて

「嘆き」ではなくて呻きです。「嘆き」と訳しているのは間違いです。

執成し給う。²⁷また人の心を極めたもう者は御霊の念をも知りたもう。御霊

は神の御意に^{かな}適いて聖徒のために執成し給え^{とりな}ばなり。」(ロマ8・26～27)

本当の本願の祈りがそれでできるわけです。ローマ書8章というのは凄い所です、時々お読みになるといい。ローマ書8章全体は福音そのものを集約してある大変なところですよ。

私が今書いている詩は究極においてももちろんキリストを讃美する詩です。お釈迦さんがどうであろうと、イエス・キリストはケタがちがう。大変なひとです。地上は32、33歳で十字架に架かってサヨナラしてしまっただけでも。こういうひとがいるかという。私は感激してしまっているものだから言葉が出ない。

● 眞の者あり

では、ヨハネ伝に入ります。7章25節から、

²⁵爰にエルサレムの或る人々いう

これはエルサレムに常住している人間だな。

『これは人々の殺さんとする者ならずや。

キリストのことです。

²⁶視よ、公然に語るに之に対して何をも言う者なし、

キリストは恐れるものがないから、そんなことに一向平気で彼は語っている。

司^{つかさ}たちは此の人のキリストたるを真に認めしならんか。

「司たち」とは衆議所サンヘドリンの人間です。まさかそんなことはなかつた。

²⁷然れど我らは此の人の何処よりかを知る、

「何処よりか」とは、地上の相対的な意味の「何処」です。ナザレに生まれたキリストのこと。何も本当は知っていない。

キリストの来る時には、その何処よりかを知る者なし』²⁸爰にイエス宮にて教^{よば}えつつ呼わりて言い給う

キリストは大きな声で言っていたらしいね。



『なんじら我を知り、亦わが何処よりかを知る。されど我は己より来るにあらず、

「君たちの知るというのは、肉なるこの世的な相対的な現実の自分のことを知っているのであって、本当は分かっているんだ」ということです。

真の者ありて我を遣し給えり。

「真の者」とはギリシア語で「アレーティノス」という。神さまのことです。おもしろいね、神さまのことを「聖き者」とか「真の者」とかいう。本ものということ。神さまだけが本ものだということですよ。

「本来は私は天界で神さまと一緒にいたんだ。それが地上に現れたんだ」というわけです。

汝らは彼を知らず、

「彼」とは神さまのこと。キリストは神さまのことを「彼」と言っている。私たちが「彼」と言うときにはキリストのことになる。

「彼はわが導きびとなり。彼はわが友なり」

とか言う。固有名詞的な「彼」というのは我々クリスチャンにとっては「キリスト」のことです。それは三人称的な言い方ですが、二人称になったら「あなた」という。祈るときには「あなたは」と言う。

29 我は彼を知る。我は彼より出で、彼は我を遣し給いしに因りてなり』

こういうことがはつきり言える人だから、大変なものだ。だから、神の子です。旧新約聖書の中心はキリストです。著者は神だけれども、中心の中心はキリスト、中心の主人公はキリストです。旧約はキリストの預言。新約はキリストの証です。

●肉なる我と霊なる我

私たちは誕生を二つもっている。私たちがお母さんのお胎なかから出てきた時は、肉の誕生です。十字架・聖霊にぶつかって、キリストに新しく生まれ変わらせていただいた「第二の我」というのは「霊なる我」です。我々は二重人格なんだ。「肉なる我」と「霊なる我」と二つある。霊なる我を本当にもっている人は少ない。クリスチャンでも観念的なのはダメです、本当に「御霊の我」でなければ。

「聖霊、聖霊」

と言ったって、「十字架」が土台になっていなければダメです。十字架で救われて、聖霊が来たのだから。ペンテコステです。使徒たちもそうだから。聖霊が来て初めて、使徒たちは十字架の何たるかが分かった。パウロがやはりそうなんだ。聖霊でひっくり返されて、後から十字架が分かった。だから、パウロは、

「自分は十字架の他は何も言うまいと思う」



と言っている。十字架が土台だという。「キリスト教」といえば、十字架になってしまっているからね。ところが、普通のクリスチャンは十字架ばかりで、聖霊がない。十字架と聖霊の両方がなくてはダメです。

³⁰ 爰に人々イエスを捕えんと謀りたれど、彼の時いまだ到らぬ故に手出する者なかりき。

キリストから言わせると、彼が捕まえられる「時」です。彼の方は十字架のことを自覚していますから。

³¹ 斯て群衆のうち多くの人々イエスを信じて『キリスト来るとも、此の人の行いしより多く徴を行わんや』と言う。

「誰が他にそんなことができるか。これは大変な人だ、ケタが違うんだ。こんな凄いことを言ったり、したりする人は他には考えられない。だからこれはキリストだ」と。

「ラザロよ、出よ！」

とか、死人を甦らせたり、棺桶に手をおいたら死人が甦って出てきたりした。

我々の、キリストの前にある姿は平伏しです。その他の何ものでもない。サタンは霊的傲慢者。キリスト者は霊的な平伏しの人です。

³² イエスにつきて群衆のかく囁くことパリサイ人の耳に入りたれば、祭司長・パリサイ人ら彼を捕えんとて下役どもを遣ししに、³³ イエス言い給う『我なお暫く汝らと偕に居り、而してのち我を遣し給いし者の御許に往く。³⁴ 汝ら我を尋ねん、されど逢わざるべし、汝等わが居る処に往くこと能わず』³⁵ 爰にユダヤ人ら互に言う『この人われらの逢い得ぬいずこに往かんとするか、ギリシヤ人のうちに散りおる者に往きてギリシヤ人を教えんとするか。³⁶ その言に「なんじら我を尋ねん、然れど逢わざるべし、汝ら我がおる処に往くこと能わず」と云えるは何ぞや』

どういうことかも知ろん分らない。

「私は神さまの所へ行くが、お前たちは神さまの所へいきなり行けるか」

というわけです。問答していても、次元がちがうものだから、どうにもならん。

●腹より活ける水

³⁷ 祭の終の大なる日にイエス立ちて呼わりて言いたもう『人もし渴かば我に來りて飲め。³⁸ 我を信する者は、聖書に云えるごとく、その腹より活ける水、川となりて流れ出づべし』³⁹ これは彼を信する者の受けんとする聖霊を指して言い給いしなり。イエス未だ栄光を受け給わざれば、御霊いまだ降らざりしなり。



「栄光を受ける」というのは昇天のことです。「御霊はまだ降らざりしなり」とは、「人々には御霊が降つてない」ということです。

40 此等の言をききて群衆のうちの或人は『これ真にかの預言者なり』といい、「かの預言者」とはエレミヤのことです。

41 或人は『これキリストなり』と言い、又ある人は『キリスト争でガリラヤより出でんや、42 聖書にキリストはダビデの裔またダビデの居りし村ベツレヘムより出づと云えるならずや』と言う。43 斯くイエスの事によりて、群衆のうちに紛争おこりたり。44 その中には、イエスを捕えんと欲する者もありしが、手出する者なかりき。

まあ、いろいろなことを言われるわけだ。

「人もし渴かば我に來りて飲め。我を信する者は、聖書に云えるごとく、その腹より活ける水、川となりて流れ出づべし」

とある。これは詩篇42篇に、

「ああ神よ、しかの溪川をしたい喘ぐごとく、わが靈魂もなんじをしたいあえぐなり。わがたましいは渴けるごとくに神をしたう。」(詩篇42・1～2)

とある。また、出エジプト記17章には、モーセが杖で磐を撃つたら磐から水が出たとある。

「視よ我そこにて汝の前にあたりてホレブの磐の上に立たん。汝磐を撃つべし、然せば其より水出でん。民これを飲むべし。モーセすなわちイスラエルの長老等の前にてかくおこなえり。」(出エジプト17・6)

また、「水」についてはイザヤ書にも、

「われ渴けるものに水をそそぎ、乾たる地に流れをそそぎ、わが霊をなんじの子輩にそそぎ、わが恩恵をなんじの裔にあたうべければなり。」(イザヤ44・3)

「噫なんじら渴ける者ことごとく水にきたれ、金なき者もきたるべし。汝等きたりてかい求めてくらえ。きたれ金なく価なくして葡萄酒と乳とをかえ。」(イザヤ55・1)

「エホバは常になんじをみちびき、乾けるところにても汝のこころを満足しめ、なんじの骨をかたうし給わん。なんじは潤いたる園のごとく水のたえざる泉のごとくなるべし。」(イザヤ58・11)

とある。

●十字架・聖霊の人

聖霊は「活ける水」「活水」であるし、また、諸々の悪いものを焼きつくす火である。水になったり、火になったりする。



「我は火を投ぜんために来れり」

というキリストの言葉がルカ伝12章にあるが、あれは聖霊の火のことです。ここは水だ。両方とも聖霊のことです。聖霊の水、聖霊の火です。

「我は火を地に投ぜんとて来れり。此の火すでに燃えたらんには、我また何を
か望まん。

聖霊の火が燃えたら、それが自分の目的だという。

されど我には受くべきバプテスマあり。

十字架のことです。

その成し遂げらるるまでは思い逼ること如何許ぞや。われ地に平和を与えん
ために来ると思ふか。われ汝らに告ぐ、然らず、反つて分争なり。」(ルカ12・

49～51)

本当の真理は却つてこの世的な考えとは合わないから、そこで紛争が起きる。

とにかく、聖書は繰り返し読まないとな。本も第一流のもの――聖書は特別の特流のものだけれども――第一流のものしか読まなくて、他のものを読む必要はない。ダンテの『神曲』とか、ゲーテの『ファウスト』、ユゴーの『レ・ミゼラブル』とか、トルストイの『復活』、ドストエフスキーの『カラマーゾフの兄弟』とか。スペインのドンキホーテの本も面白い。『ファウスト』は非常に福音的であるわけではないけれども、ゲーテというひとともなかなか聖書を愛読した人だから、その中にメタモルフォーゼをして変形して出ている。

要するに、新約聖書を読んで、その言葉の背後にあるキリスト、聖霊、これを身体で受けとるような読み方をしないと、聖書を読んだってつまらんです。身体で受けとるんですよ、頭ではない。身体で全存在で受けとる。そうすると、身体が熱くなる。力がくる、光がくる、生命がくる。私の生命力の根源はそういう事態です。それだから元気なんだ。正に霊気の世界です。藤田東湖が

「天地正大の気」

と言った、そういう霊気です。

人がものを言っている時に、

「この人は本当に聖霊の人だ」

とか、

「いやどうもまだ本当の意味で聖霊が生きていないな」

とか、これは語っているところを聞いていて分かる。だから、どうぞ皆さんは、十字架・聖霊の人として、

「私の中心は十字架と聖霊です」

とはつきり言えないとね。

「聖書のどいだ、いいだ」



なんて、そういうことではない。

●聖霊の力と智慧

旧約聖書の中心は何といってもイザヤ書です。詩篇ではない。イザヤ書は大変なところ
です。これは全聖書の縮図みたいなところだ。これは三人くらいで書いている。第一イザ
ヤが1章から39章まで、第二イザヤは40章から55章まで、56章から66章が第三イザヤです。
大変な本だ、読んでいて驚嘆する。

「参りました!」

と、降参して読む。降参して読むとは本当にそうなんです、

「分かる、分からない」

ではない。「参りました」と言つて読むときに、本当にその内容が入ってくる。頭で「分かる、
分からない」なんて言っている人は、いつまでたつてもダメです。

パウロもキリストに降参した。それだから、凄いことになった。パウロもペテロもヨハ
ネもそうだ。ヨハネは割合にスーッと入っていった人だ。ペテロは波型なんだ。パウロは
電光石火型だ。人間にはいろいろな型があるから、どれがいいの悪いのではない。人によつ
ていろいろな型がある。

今日は、我々はこの活ける水になったわけだ。活水になった。泉のごとき人間です。キ
リストの泉が湧いている。池ではない。泉でなければ。

いろいろなものが海の中に流れ入るけれども、海そのものは塩でもつてそれを全部、浄
化してしまう。海というものは素晴らしいね。塩というのは浄化作用がある。どうして海
にはあんなに塩分があるのかね。塩がないとダメなんだ。人間も塩辛いものをもつてない
とダメだ。味をつけるときには塩で味をつける。砂糖で味つけたものはダメなんだ。

あなた方、相撲を時々見ているかい。相撲も取りかたのコツがある。私は親方になって
やりたいくらいだ、

「ダメだぞ、あんなのは」

なんて言つてね。力ばかりではないんだ、コツがある。何を見ている、聖霊の智慧で見
ていると、本ものが分かる。何事をするのにも、聖霊というものが、もの凄いいろいろな
角度の力を、内容をもっている。聖霊というものは内容の豊かなものです。私が詩を書い
ているのもみなこの聖霊の力と智慧です。

